

氏 名（本籍）	はやし 林	みつこ 美都子（広島県）
学位の種類	博	士（心理学）
学位記番号	博 甲 第 3598 号	
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当	
審査研究科	心理学研究科	
学位論文題目	意識的・無意識的処理過程と記憶高進現象	
主 査	筑波大学教授	教育学博士 太 田 信 夫
副 査	筑波大学教授	教育学博士 海 保 博 之
副 査	筑波大学助教授	博士（教育学） 茂 呂 雄 二
副 査	筑波大学教授	博士（心理学） 吉 田 茂

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、認知心理学的アプローチにより、再認・再生記憶高進現象のメカニズムと記憶高進現象における意識的・無意識的記憶の役割を明らかにすることである。

本論文は4部よりなる。第1部では、記憶高進研究の概要、認知心理学的な無意識的記憶の測定方法についてまとめ、本論文における問題意識と検討事項をまとめた。まず、第1章に記憶高進の定義、1970年代以降を中心とした認知心理学的な記憶高進研究、再認・再生の記憶高進の理論をまとめた。記憶高進(Hypermnesia)とは、再学習なしにテストを繰り返したときに記憶パフォーマンスが向上を示す現象であり、忘却した情報を思い出す Reminiscence と覚えていた情報を忘却する Forgetting という2つの下位現象から成立している。絵画的・高イメージ・有意味な記銘材料を用いると生起しやすく、生成効果などの基礎的変数から加齢効果などの応用的変数にいたるまで、幅広い研究が行われている。基本的に、自由再生のパフォーマンスを向上させる手続きや変数で生起しやすい。一方で、再認手続きについては生起するか明確ではない。また、無意識的記憶が関わっているのではないかという指摘が多数なされているが、認知心理学的アプローチでの研究はほとんどない。

第2章には、無意識的記憶への認知心理学的アプローチとして代表的な手法である、プライミング手続き、過程分離手続き、Remember/Know 手続きをまとめた。プライミング手続きにより無意識的記憶における記憶高進現象の生起、過程分離手続きにより記憶高進現象における意識的・無意識的記憶の役割、Remember/Know 手続きにより Reminiscence と Forgetting における意識的・無意識的記憶の役割が明らかになることが期待される。しかし、記憶高進現象をこれらの手法を用いて検討した研究はあまりない。

第3章には、上述の測定法を用いて記憶高進を測定する際の問題点と本論文での検討事項をまとめた。記憶高進研究ではテストを繰り返し行うため、各手続きの制約による問題が生じやすいことに加え、再認記憶をベースとした手法である過程分離手続きと Remember/Know 手続きに関しては、記憶高進研究において再認・再生記憶高進現象のメカニズムがいまだ明らかではないという理論的問題も指摘されよう。

そこで本論文では、第2部において再認・再生記憶高進現象のメカニズムを検討し、その結果を踏まえて、第3部で、認知心理学的アプローチを用いて、意識的・無意識的記憶における記憶高進現象を検討すること

とした。

第2部では14実験を行い、再認・再生記憶高進現象の理論であるイメージ仮説 (Erdelyi & Becker, 1974; Erdelyi & Stein, 1981)、代理検索回路仮説 (Kazén & Solís-Macías, 1999)、ならびに本論文で提唱する意味付加仮説を比較検討した。記憶高進が生起するのにもっとも重要な要因として、イメージ仮説ではイメージ符号化、代理検索回路仮説では形式変換（記銘時と検索時で言語形式か絵画形式かが異なっていること）、意味付加仮説では意味的处理をあげている。

上記の3仮説の検討には、第4章にその特色をまとめたドルードル課題（西本, 2000；西本・高橋, 1996）を主に用いた。

第5章ではイメージ仮説と代理検索回路仮説に基づき、再認記憶高進が生起することを示した。また両仮説の検討を行ったところ、代理検索回路仮説が支持され、その結果は意味付加仮説でも解釈可能なことが示された。

第6章では記銘材料の統合性（Gestalt）の観点から3仮説が検討され、記憶高進生起の有無の予測という観点から、代理検索回路仮説と意味付加仮説が支持された。

第7章では記憶高進生起の主要因が形式変換によるものか意味的处理によるものか直接比較を試みるため、ドルードルに形態的ラベルもしくは意味的ラベルを生成させたところ、意味付加仮説が支持された。

第8章では、5文字のひらがな単語を用いた実験を行い、以上の結果がドルードル課題特有でないことを確認した。

第9章では第2部の成果をまとめ、再認記憶高進の生起が示されたことと、再認・再生記憶高進の説明理論として意味付加仮説が優れていることに関して述べた。

第3部では、2調査と21実験を行い、意識的・無意識的記憶における記憶高進現象を検討した。第10章では、第3部での検討に主に用いる、ひらがな5音節名詞を用いた2音節語幹完成課題を作成し、プライミング手続きと過程分離手続きを用いて妥当性を確認した。

第11章では、プライミング手続きを用いた記憶高進研究で特に問題となるであろう意識的想起汚染問題に検討を加えた。

第12章では、プライミング手続きを用いて検討を行ったが、無意識的記憶高進の生起は示されなかった。しかし、Reminiscence と Forgetting の分析から、無意識的記憶ではテスト間隔が長い場合、記憶高進の生起する可能性が示唆された。

そこで第13章では、テスト間隔を1週間としてプライミング手続きによる検討を加えたが、無意識的記憶においては知覚的处理を行った場合に記憶高進の生起する可能性が示唆されるに留まった。

第14章では過程分離手続きを用いて、記憶高進が生起している場合は意識的記憶が、生起していない場合は無意識的記憶が中心的役割を果たしていることを示した。

第15章では、Remember/Know 手続きを用いて、記憶高進の下位現象の生起には、無意識的記憶の関与が比較的強く、重要であることを示した。

第16章では第3部の成果として、記憶高進は意識的記憶中心の現象であり、無意識的記憶は下位現象の生起に関与し記憶高進現象自体に関与している可能性は低いことがまとめられた。

続く第4部第17章では、本研究で得られた知見を次の3点にまとめ、総合討論を行った。

- (1) 先行研究で報告例の少ない再認記憶高進であるが、天井効果が生じなければ、ドルードル課題や語幹課題を用いて生起することが示された。また、その説明理論として、意味付加仮説が提唱された。
- (2) 記憶高進は、先行研究を含め意識的記憶において生起したとの報告が多く、無意識的記憶において生起する可能性は低いと思われる。意識的記憶ではテスト間隔が短く、意味付加仮説に基づいた場合に記憶高進は生起しやすいことが示された。一方、無意識的記憶における記憶高進が生起するとすれば、保

持期間やテスト間隔が充分長く、知覚的处理に基づいている場合である可能性が示唆された。

- (3) 認知心理学的アプローチを用いたところ、先行研究での指摘と異なり、記憶高進は無意識的記憶ではなく意識的記憶中心の現象であることが明らかとなった。無意識的記憶が中心的役割を果たしているのは、記憶高進の下位現象においてであることが示された。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、記憶高進の認知活動を明らかにするため、意識、無意識両面から、多くの実験と調査により実証的検討を加え、まとめたものである。意識面の検討では、ドルードル課題という、まだ一般的にはよく知られていない新しい課題を使い、意味付加仮説の妥当性を検証した点、大変独創的である。また無意識面に関しては、広範囲の調査を基に語幹完成課題の標準化を行い、この課題を使った潜在記憶の代表的な研究法を記憶高進実験に適用し、無意識的認知活動の役割を検討したことは、発想において独創的である。また今後の研究の発展を促すような、いくつかの成果が認められる。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。